

研究ノート

ハワイ日蓮宗別院と真珠湾攻撃七十五周年

平井智親

一、はじめに

平成二十八(二〇一六)年は、真珠湾攻撃七十五周年の年であった。その記念行事にハワイ日蓮宗別院が大きく関わったことは、日蓮宗新聞や日本国内の新聞各紙で報道されたので、ご存じの方も多いと思う。そこで、その経緯などについて述べてみたい。

二、真珠湾攻撃日本側犠牲者英霊簿

言うまでもなく、昭和十六(一九四一)年十二月七日(現地時間)に行われた真珠湾駐留アメリカ太平洋艦隊への奇襲攻撃は、歴史の大きな転換点であった。事前通告なしに実施された攻撃で、アメリカ軍は二千三百九十名もの犠牲者を出し、軍艦航空機の被害も甚大で、日本との全面対決をためらうアメリカ世論を一気に変えた。この攻撃が契機となってアメリカは宣戦を布告し、太平洋戦争に突入することになった。昭和二十(一九四五)年八月十五日のポツダム宣言受諾に至るまで、四年に亘る戦争となり、その影響は今日もなお続いていると言える。

平成二十八（二〇一六）年は真珠湾攻撃七十五周年の年ということで、ハワイにおいていろいろな記念行事が催された。その中で、忘れられていたことがある。それは、その攻撃側、日本の犠牲者である。真珠湾攻撃において、落命した日本海軍の六十五柱のことは長く忘れられてきた。米側犠牲者と違い、加害者側であったため、長い間公式な形で認知も追悼されることもなかった。攻撃当時、人口の約半数を占めた日系人の住むハワイでは、父祖の地である日本が攻撃してくるとは夢にも思っていなかった。そのため、攻撃した日本に困惑と憎悪がハワイから向けられた。攻撃の結果、職を追われ、住む所を追われ、収容所に入れられた者も多く、激しい社会的差別の対象となり、文字通り生活環境が一変したのであるから、日系人の気持ちは察するに余りある。自分たちを窮地に立たせたものへの追悼などハワイではとても考えられなかった。

一九七〇年代に、自分自身は軍人ではなかったものの、供養されていない英霊のことを知った日本在住の秋田^{はじめ}甫氏が真珠湾攻撃の日本側犠牲者の霊簿を作り、ハワイの各宗派の別院を訪ね奉安を依頼したが、全て断られたという。これも仕方のないことと考えられる。しかしその時、敢然と受け入れを決断したのがハワイ日蓮宗別院の第十代堀教通師であった。昭和四十八（一九七三）年六月二十九日に当別院に奉納された霊簿には五十九柱の名前があったという。堀師の英断を困難な状況における仏教者のあるべき姿として高く評価したい。

この霊簿受け入れに先立つこと十年、昭和三十八（一九六三）年十二月七日に日蓮宗の藤井日静管長や金子日威宗務総長を初めとする一行がハワイを訪れ、沈没した戦艦アリゾナ号上で日米両側の犠牲者のために追悼法要を営まれた。現在日蓮宗では、管長と宗務総長が、揃って外遊することはない。ハワイ側から見ると、管長と宗務総長が一緒に来て頂いた最初で最後の機会に、真珠湾で供養をして頂いたということになる。日本国内でも管長と宗務総長が揃って法要に出仕されることは滅多にないので、供養を受けた諸霊が大いに喜び、後日霊簿を格護することに繋がったといえるかもしれない。

さて、最初に五十九柱であった犠牲者の数は、一連の軍事行動中落命した六柱を加えて、最終的に六十五柱になった。当時第三次攻撃隊指揮官であった阿部平次郎氏が補正をして、英霊簿を二冊作成された。第十一代村野宣忠師の時にその内の一冊が当別院に改めて奉納された。昭和五十八（一九八三）年十二月七日のことであった。以来当別院では戦争犠牲者に対して回向が続けられている。もう一冊の霊簿は、翌々日の十二月九日にアリゾナ記念館のカミング館長に進呈され、館長は喜んでこれを受け入れ、記念館の一隅に安置することを確約されたという。

平成三（一九九一）年十二月七日、当時のブッシュ大統領は、真珠湾攻撃五十周年の記念行事に参加し、「この日を以て過去の恩讐を乗り越えて、日米は共に友好の絆を強めていくことが世界平和に貢献する最大の道である」と演説した。この頃から、真珠湾攻撃に対するアメリカ側の感情が和らいできた。

真珠湾攻撃五十周年を記念して、当別院においても平成四（一九九二）年六月三日に、日米犠牲者の追悼法要が営まれた。旧日本海軍航空隊OBとその遺族で組織する甲飛会約三百二十名と、米軍側から現役将校並びにOBが参拝された。恩讐を越えて共に犠牲者の冥福を祈る姿は印象的であった。その時に、もう「リメンバー・パールハーバー」や「ノー・モア・ヒロシマ、ノー・モア・ナガサキ」ではなく、これからは「ピース・フロム・パールハーバー」「ピース・フロム・ヒロシマ、ピース・フロム・ナガサキ」であると説いた第十二代小川如洋師の法話は日米双方に深い感動を与えた。それ以降毎年、日本海軍ハワイ会や海原会、甲飛会等の方々が慰霊のため別院を訪れ追悼法要を営むようになった。しかし、その内日本から慰霊に来られる方々も段々と高齢となり、継続的な参拝が難しくなった。そこで、平成十八（二〇〇六）年十二月七日、真珠湾攻撃六十五周年を区切りとして日本からの参拝者を迎えて最後の法要が執り行われた。これ以降は、毎日の回向に加えて、別院で毎年十一月中旬に行われている永代経法要の折に併せて追悼が行われるようになった。

別院の霊簿には、一枚の紙が挿入されている。それは、昭和二十（一九四五）年六月二十日、静岡市を空襲した時

に撃墜されたB―二九に搭乗していたアメリカ軍の犠牲者二十一柱の名簿である。具体的な日時は不明であるが、小川師の時代に静岡市の医師である菅野寛也氏すがのひろやによる奉納である。霊簿はいつも本堂に格護されており、私達はお経を読み、仏様の教えを説き、多くの人に供養する時、自然と日米両側の犠牲者のために祈っていたことになる。そしてこれは、仏様の慈悲の教えにも適い、素晴らしいことと考える。

第二次世界大戦後長い月日が流れ、直接の関係者の多くが鬼籍に入る中、状況が変わってきている。現在の日米の繁栄と良好な関係を鑑みる時、真珠湾攻撃は不幸な出来事であったものの、その犠牲者は今日の平和の礎であったことは間違いない。そのような考え方の下に追悼されるべきものと考ええる。そして、同じ戦争で散った日米両軍の犠牲者を対等に同時に弔うべきものと考ええる。

仏教には、怨親平等という思想がある。これは、敵味方を問わず、恩讐を越えて、仏教の慈悲を以て双方を弔い、来世の幸福を願うということである。

不幸にして戦争において敵対することになっても、個人的な恨みや殺害動機を持つ場合はほとんどない。それよりも、国を守る家族を守るという犠牲的精神で戦地に赴く場合がほとんどであった。戦争が国と国との闘いであるのなら、戦地に散ったそれぞれの命は、どちらの側であっても犠牲者といえる。

三、真珠湾攻撃七十五周年慰霊追悼法要

日米の犠牲者のために、私は慰霊追悼法要を真珠湾で執り行いたいと思っていた。アリゾナ記念館にはアメリカ側の犠牲者の霊簿があり、ハワイ日蓮宗別院には日本側犠牲者の霊簿がある。この二つの霊簿を並べて、日米の犠牲者を同時に追悼したいと考えていた。

七十五周年にあたり真珠湾において米軍の主催で様々な記念行事が予定されているのを知った。しかし、日本側犠

犠牲者を追悼する行事については終ぞ聞かれなかった。英霊簿をずっと格護し、回向してきたハワイ日蓮宗別院としてこの機会に沈黙を保つことは許されないと考えた。そこで、在ホノルル日本国総領事館の三澤康総領事が、防衛省から出向の東裕里領事を伴い、八月十一日に当別院を訪問されたのを好機として、米軍犠牲者をも対象とした日米合同追悼法要を懇願した。三澤総領事は趣旨を深く理解され、協力を快諾された。

ただ、法要の開催はかなり難しいことと理解していた。その理由は、大掛かりな行事がいろいろ計画されている中で、わずか三ヶ月半しか時間がなく、三澤総領事とはそれほど親しくはなく、私自身米軍関係者に知人もいなかった。一ヶ月ほど時間が経った。総領事館からの連絡はなかった。少し残念ではあったが、別院で自分たちだけで行うことを考えていた。秋の彼岸の後、三澤総領事が東領事を伴い再び訪ねて来られた。米軍はもとより各方面に働きかけを行った結果、開催は可能だという。不可の通知のためわざわざ出かけて来られたのだろう、なんと義理堅いことだろうと思っていたので、心底驚いた。

いろいろなご尽力の結果、開催することが可能となったが、当日ではなく、翌十二月八日ならという話であった。十二月八日は釈尊成道の聖日であり、追悼式典を行うには仏教徒としてこの上ない日である。もちろん異論はなかったし、深謝のみであった。

私は、七十五周年という機会にどんな形でもいい。日米の犠牲者を同時に追悼したい。戦争の犠牲者であり、国家の犠牲者である英霊。その英霊は今日の平和と繁栄の基礎であり、良好な日米関係の礎であり、深い感謝の念を捧げたい。併せて、第二次世界大戦が最後の世界大戦であるように、第二次世界大戦の犠牲者が最後の世界大戦の犠牲者であるように、世界平和を祈念したいと強く思った。

しばらくして、三澤総領事から、真珠湾での慰霊式典開催にあたり、共催相手が変更になったことを聞かされた。当初の共催相手は、その団体代表の意向で開催を予定し、団体施設内での慰霊式典を想定して検討していた。しかし、

団体幹部に話が伝わると、理事の中で日米両方の慰霊式典を快く思わない人がいることが判明し、理事会での紛糾を恐れた代表が共催を辞退するという事になった。結果的に共催は、最高の相手といえる米海軍ハワイ方面司令部が担うこととなった。共催相手が変更になり、それに伴い開催場所もアリゾナ記念館対岸のフォード島内となった。その場所は、アリゾナ記念館が建設されるまで慰霊式典に使われていた場所で、願ってもないことで、本当に有難かった。ただ、在ホノルル日本総領事館と米海軍ハワイ方面司令部の共催による式典となるため、いろいろな制約があることを告げられた。もちろん否も応もなかった。全てを受け入れると回答したものの、米海軍の慰霊の形が当宗のそれとは大きな違いがあることは明白だった。これは最初の試みであり、今後継続充実していくことを考慮して努力したいという三澤総領事の言葉に救われる思いであった。

制約の内容は、具体的な議論が深まるにつれ徐々に明らかになっていき、最終的には、軍事基地内という条件から、参加人数制限、米海軍の式次第で行うこと、マスコミの取材制限などであった。参加者は米軍の都合で合計八十名。軍関係者が多数を占める中、地元ハワイの日系団体の代表者も招くことになり、ハワイ仏教連盟加盟各宗派代表者等も加えて頂いた。発案者としての立場から、特別に日蓮宗として四名分の枠をお願いし、プウネネ教会主任の川口智徳師とホノルル妙法寺主任の山村尚正師も招待。日蓮宗宗務院からの代表者も考慮して頂いた。

宗務院に視察目的という形で代表者を派遣して頂いた理由は、宗門では毎年八月十五日に千鳥ヶ淵で戦争犠牲者のための追悼法要を行っている。これは、日本の犠牲者を中心としたものであるが、その他の者も含めたすべての犠牲者を追悼するものと理解している。終戦の日に行われる宗門法要に対して、戦争勃発の地で行われる今回の真珠湾式典は対をなし、大きな意味があるものと考えた。そのため広く宗内に告知することは重要と思うに至った。今回の一連の行事を視察し、宗門の立場や考え方と共に、宗内外に広く公にして頂きたい。これもずっと忘れられてきた日本側犠牲者に対する供養と考えた。余日がない中で急な申請となったが、事情をご賢察頂き、伝道部国際課の佐々木

康文課長を派遣して頂いた。深謝したい。

十二月七日、米軍主催の真珠湾攻撃七十五周年記念式典に、世界連邦日本宗教委員会のメンバーとして参加する機会を得た。真珠湾内の埠頭に四千人を集めて行われた本記念式典は、一連の行事の中心をなすもので、全米に生放送で中継された。主催者であるアメリカ太平洋艦隊司令長官ハリリー・ハリス提督のスピーチは、アメリカ軍の英霊を讃え、その栄光を賛美する感動的なものであった。もし私が米兵の一人であったのなら、命懸けで国を守る決意を新たにしたいかもしれない。少し残念なことは、現在の日米関係に対する配慮は十分感じられたものの、真珠湾攻撃で散った日本側犠牲者については敢えて言及がなかったことである。

翌十二月八日、午前七時三十分真珠湾アリゾナ記念館ビクターセンター前に集合し、貸切バスに乗ってフォード島に向かった。フォード島は、真珠湾内に位置する島で、昔はその中央に滑走路があり軍事施設がひしめき合っていた。当時は、島をとり囲むように沿岸に戦艦が二列縦隊で係留されており、その中の一艘がアリゾナであった。現在では、沈没したアリゾナ艦上に記念館が建てられており、そのすぐ後ろに、日本が降伏文書に署名した船として有名な戦艦ミズーリが係留されている。その他、太平洋航空博物館が開設され、軍人専用の住宅などが立ち並んでおり、基地内ではあるものの、重要な施設は島外に移転している。滑走路も雑草に埋もれて確認できない。今となっては、真珠湾は太平洋戦争開始の場所であると共に、終了の場所ともなっており、日本にとって非常に感慨深いところとなっている。

先述の通り、フォード島は軍事基地内に位置する。厳しい検問があり、基本的に軍関係者しか立ち入ることができない。そのために、現地集合ではなく、わざわざバスを貸し切つて、事前に登録した者だけを乗せて向かわざるを得なかった。式典を行った場所は、広場になっており、中央に大きなパニヤンの木が枝を広げている。大きく茂る木の下に椅子を八十脚並べ、演台一つが前に置かれていた。その向こうには、アリゾナ記念館が浮かんでいた。本当に驚

くほど距離が近く、戦艦を係留するための大きな鎖が海中に伸びていた。不意を突かれ、安全に停泊するための鎖でかえって身動きが取れず、さすがにそのまま攻撃され、多くの兵士と共に命運を共にした船が眼前に横たわっていた。戦争には加害者も被害者もない。ただ、犠牲者があるのみ。そのような気持ちがかみ上げてきた。

米海軍式の追悼式典は、スピーチが大きな部分を占める。黙祷を捧げる時間はあつけないほど短かった。私にとつての救いは、米海軍の音楽隊による日米両国の国歌吹奏と、川口師の龍笛りゅうてきの演奏であった。それは宗教家に許された式典中唯一の行事であった。日蓮宗教師が、略装とはいえ道服折五条で吹く調べは、両軍犠牲者の諸霊を大いに慰めたことを信じて疑わない。出席していたホノルル市長カーク・コールドウェル氏も川口師の龍笛に賛辞を惜しまなかった。私は、別院什物である日本側犠牲者の霊簿と共に、十一月二十八日にアリゾナ記念館の主任歴史家であるダニエル・マルチネス氏に頂いた米側犠牲者の霊簿を風呂敷に包んで持参し、式中ずっと懐に抱きながら、胸中お題目をお唱えしていた。生憎の曇天で、対岸は雨が降っていて心配したが、式典は滞りなく終わった。仏祖三宝並びに諸霊のお蔭を蒙ることができた。

真珠湾での式典後、別院において、真珠湾攻撃七十五周年慰霊追悼並びに世界平和祈願法要を同日午前十一時から執り行った。三澤総領事ご夫妻、防衛省代表、遺族代表、米側代表など様々な人が集まった。小衾が導師を務め、川口師と山村師が式衆、宗門代表として佐々木国際課長とハワイ仏教連盟各宗派代表者が諷経として座した。御宝前に日米両側の犠牲者の霊簿を並べ、香を手向け至心にお題目をお唱えした。その時の気持ちをごどのように表しているかわからない。今更ながら、犠牲の尊さと大きさ、今日の友好と平和の有難さが胸中を去来した。

四、法要後

法要の影響は、私の予想をはるかに超えていた。総領事館から事前に伝えられていた報道関係は二社で、それでも

日本の関心の高さの表れと考えていた。ところが実際には、地元ハワイのマスコミ以外に、通信社、新聞社、テレビ局など多数が取材のために日本から飛んできた。総領事館にとっても想定外であったようで、急遽記者会見を開かざるをえなくなった。そこで追及されたことは、なぜ真珠湾フォード島での法要に取材が許されなかったのかということだったらしい。後に教えられたことは、米海軍も世間の関心の高さに驚き、また日米両方の慰霊追悼ということで、米軍退役軍人会などの反発があるのではないかと恐れたため取材を制限したという。しかし、この心配は実際には杞憂であった。管見の限り、否定的評価は聞かれなかった。

真珠湾での慰霊式典の直前、安倍晋三首相の真珠湾訪問が発表された。オバマ大統領と共に慰霊に訪れるという。願ってもないことと喜んでいたところ、十二月二十七日の両首脳の共同声明発表の場に真珠湾式典参加の面々と招待を受けた。共同声明発表の場への招待客は、米側二百名、日本側百名の合計三百名。それに、数多の報道関係者がカメラの砲列を並べた。ただ、急な発表で総領事館も混乱し、ギリギリでの招待となった。そのため、宗務院において再度役職員を派遣して頂くことは叶わず、代わりにシアトル駐在の村上英岳師にお手伝いをしてもらうことになった。現役のアメリカ大統領と日本国首相が共に真珠湾で慰霊をして声明を発表するなど、史上初である。これもまた、仏祖三宝と諸霊のなせる業というべきであろう。その場に立ち会えた僥倖をどのように謝すればいいのか。両首脳の演説を聞きながら、真珠湾に集まったであろう犠牲者の諸霊はどれほど喜び、慰められていることだろうと思っ

た。

大統領と首相の慰霊並びに声明は、法要以上に大きな反響を呼んだ。日米両方のトップニュースとしての扱いであった。そしてそのほとんどが好意的評価であった。オバマ大統領が広島を訪問した際に謝罪するかどうかが関心を集めた。直接的謝罪の言葉はなかったため、日本での報道の中には否定的なものもあったようである。安倍首相の真珠湾訪問においても謝罪するかどうかが関心を集めた。その言葉の中に直接的謝罪の言葉は今度も見当たらなかった。

しかし、アメリカの報道の多くは、それでも好意的であった。私が意見を聞いた多くの人も、七十五年も経って今更謝罪など必要ない。慰霊追悼だけで充分。それより、友好的現状を今後も維持することの方がより重要と考える人が大半であった。

両首脳の共同声明発表後、防衛省の方と共に日本ハワイ友好議員連盟の三名の衆議院議員の方が別院を訪ねて來られた。武田良太代議士、今津寛代議士と共に、法華一乗会（日蓮宗信徒である国会議員の集まり）所属でもある中山泰秀代議士であった。国民の代表である国会議員に、香を焚き、手を合わせてもらったことは、大変有難かった。日本側犠牲者にとっても感慨一入ひとしほであったことは想像に難くない。

五、結びに代えて

一連の行事を滞りなく終了することができたことは、正しく仏祖三宝と犠牲となった諸靈位のお蔭である。その慈恩に報謝したい。また、宗務院を初め、ハワイ日蓮宗国際布教師会、ハワイ仏教連盟、在ホノルル日本国総領事館、アメリカ海軍ハワイ方面司令部、その他多くの方々のご尽力に深謝する。

犠牲者に対する追悼の祈り、友好平和を願う祈りに終わりはない。ハワイ日蓮宗別院は、これからもその責務を永劫に果たす覚悟である。

（本稿は、『日蓮宗ハワイ開教百年史』と『ハワイ時報』第二号に掲載されたものを加筆訂正したものである。日蓮宗現代宗教研究所の三原正資所長のご厚意により掲載の運びとなった。特に記して謝意を表したい。）